

解説07 長編小説の粗筋（あらすじ）をまとめる

—もう1つの物語を作る—

【課題のねらい】

本課題のねらいは3つあります。1つは、ふだんはあまり読まないかもしれない長編小説を、とにかく読み通すこと。2つめは、そこに書かれている内容を自分の言葉でまとめ直すこと。3つめは、この作業を通じて、自分の視点に立ってまとめることの難しさと重要性を理解することです。

【解説】

小説を読むという作業は、基本的にとても楽しいものです。それは、国語の授業がある、感想文の宿題がある、といった理由で嫌々やるようなものではありません。好きな映画をわざわざ映画館まで行って見るように、うきうきと心楽しいものです。そして、面白い映画を見た後、次の日に思わず友達に感想を話して面白さを伝え、見に行くよう勧めたくなるように、その小説について話したくなる、面白さを伝えたいくなる、そんなものです。では、友達に話そうとするとき、何を伝えればよいのでしょうか。一番必要な情報は、どんな話なのか、という内容説明です。たとえば、夏目漱石の『こころ』は、

(1)先生と呼ばれている男が、かつて愛する女を手に入れるために友人を裏切りその友人を自殺させてしまった。その後悔を引きずって生きていた先生は、後に明治天皇の死を契機にして自分も自殺してしまう。(93字)

と書くと、100字程度でまとめることができます。しかし、このように簡単にまとめると、この小説の語り手の「私」という青年のことや先生の奥さんのことが抜け落ちてしまいます。これでは、『こころ』の面白さを十分に伝えることはできません。では、

(2)ある男が、学生時代に下宿のお嬢さんに恋をした。ところが、友人Kも彼女に恋をし、それを打ち明けられた男はお嬢さんの母親に結婚を願い出てKを出し抜いてしまう。その結果Kは自殺してしまった。男はお嬢さんと結婚したが、Kを殺した後悔を引きずって、世間から隠れるように生きていた。その男と知り合った青年「私」は男を先生と呼び私淑する。そして、男（先生）にその過去を教えてくれ、と頼み込んだ。男（先生）は、明治天皇の死と乃木将軍の殉死を契機にして、自分の過去を長い遺書に書いて青年に送り、自殺してしまうのだった。(250字)

こう250字くらい使って書けば、少しは内容を伝えることができるでしょう。それでも、読んだ人には、青年（私）や男（先生）、Kのそれぞれの過去が十分語られていない物足りなさが残るかもしれません。つまりは、面白さのすべてをおおよその説明で伝えることは難しいのです。よりよく伝えようとすれば、どんどん長くなってしまいそうです。

結局、読んでみるしかその面白さはわからないのですが、今示した2つの粗筋は長さの違いだけではなく、『こころ』という小説の内容について違う視線が存在することを示してもいます。(1)の方は「先生がKを殺してしまったという後悔で自らも死ぬ」というように、〈男とKの自殺〉に焦点を当てています。それに対して、(2)の方は、先生と青年の関係にも注目し、また乃木将軍の殉死が意味を持つと考えていることもわかります。このように、読んだ小説の粗筋を作ってみることは、どのように自分がその小説を読んだかを確認する作業なのです。これはまた、自分の読んだ小説の読み方を、粗筋という形で、もう1つの物語として組み立てることもあります。だから、粗筋は実は書く人によってみな違っているのです。

課題として示したのは、近現代日本文学の中でも長い小説です。長い小説を読むことにみなさんはあまり慣れていないかもしれません。苦勞して読んで、その小説が自分の中にどのような形で残っているか、うまく確認できましたか。いかに読み、いかに理解したかを自分の言葉でコンパクトにきちんと示すことは、小説の粗筋だけではありません。これから大学で学ぶ際に求められる、絶対に必要な力です。